報告

橘千蔭自筆「父枝直十三回忌追悼の文」について

On Tachibana-Chikage's "Tribute to the memory of my father, Enao, on the 13th anniversary of his death"

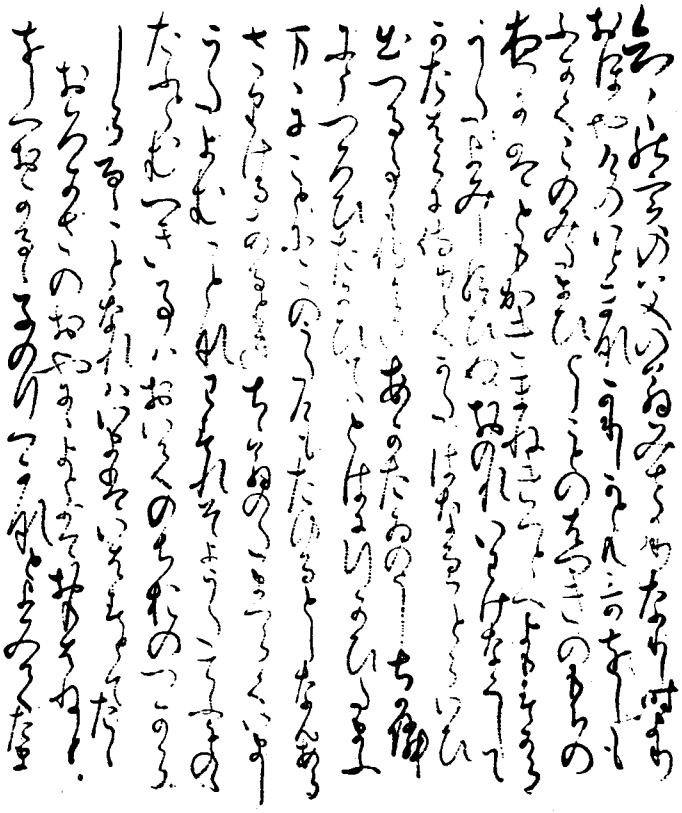
溝渕淑恵

橘千蔭が加藤千蔭であり、その父が加藤枝直であったことは衆知のとおりである。手もとの『和歌文学大辞典』（昭和三十七年十一月明治書院刊）によると、

千蔭（享保二〇1735—文化五1808・九・二。七四歳。加藤氏。本姓は橘。通称は常太郎。要人、後に又左衛門。父以来の芳宜園をはじめ、朮園・逸楽窩・橘八衢狂号などと号した。〔閲歴〕江戸の産で歌人枝直の第三子。父は吉宗の治世に大岡忠輔の下で与力を勤める一方、江戸に出た賀茂真淵を援助しその高弟であった。この枝直の公私の生活がそのまま神童と讃えられた俊秀千蔭に投影し、一〇歳で真淵に入門し、早く英才を認められて二〇余年の師弟の交わりを結んだ一方、三〇歳では父の後を次いで奉行所吟味役の与力となり、次いで田沼意次の側用人に挙げられた。世にいう田沼時代の弊政は二〇余年に及び、この間公職に在った彼は次の松平定信の粛清に遭い、減俸閉門を命ぜられるに至った。初学的全釈『万葉集略解』の名著はこの一〇〇日間の所産である。かくて五〇余歳にして公職を辞してから作歌と古典学に専念して名声大いに揚り、また書法は大師流の正統を伝えて世に千蔭流と謳われ、画もまた一家の風を成すなど、妙法院宮・富小路貞直らの貴人から卑賤の徒までがその作品を愛重した。風流な生活と文雅の天分とが渾融して、明和・寛政頃を背景とした都会的文化人の典型である。〔業績〕相容した同門村田春海と同じく、学者というよりもむしろ歌人として傑出した。優麗温雅にして繊細洒脱な江戸派の歌風を学者歌の多い県門に樹立した功はこの二人に帰する。その実績が家集『うけらが花』七巻である。それは師真淵が理想とした万葉調になじまず、むしろ古今・新古今的に洗練された近世調に時代感覚を表現せんとした。『答長瀬真幸書』安政五・『答小野勝義書』・『答富小路貞直卿書』享和元・『歌のをしへ』寛政一二・『芳宜園歌話』等の千蔭の歌論書の要旨は、師の古体になずまず、彼が近体を採用した信念の論弁である。

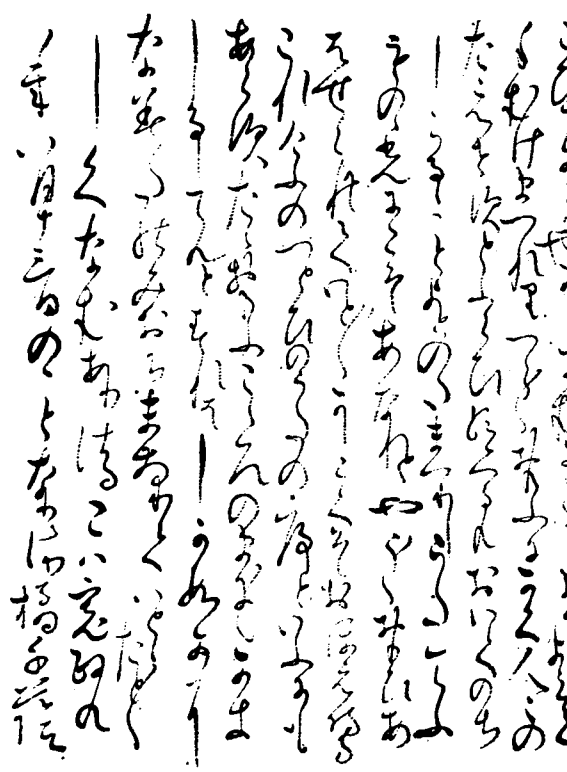
と村田邦夫氏によって詳細に説かれてあるが、千蔭流と呼ばれるその筆蹟は、現在多く伝えられていて決してめずらしいものではない。た

だ、このたび拝見した「枝直君十三回忌追悼千蔭君文」（田中重太郎先生所蔵）と題する一巻は千蔭の亡き父をいかに敬慕し、なつかしみ、また、その恩に謝し、さらにその影響で彼が作歌をこととし、歌会をつづけて来た経緯がよくわかる。わずか五十行程の一文ではあるがまことにすぐれた擬古文であるといえよう。学界未紹介の資料なのでここに原文を活字にし、句読点・濁点などを施し、本文の右に適当に漢字などをしるして読解に便にした。



（枕詞）（枝直）壮年
ちゝの実の父の翁みさかりなりし時より
公務　暇
おほやけのいとまなかりしかども、哥をしも
深　好　年　毎（陰暦）八月十五日
ふかくこのみたまひ、としごとのはつきのもちの
友　垣　招　集　終夜
夜には、ともがきまねきつどへ、よもすがら
歌　詠　己　幼
うたよみし給ひぬ。おのれいわけなくして
傍　聴　未熟　歌　詠
かたはらに侍りて、かたはなることらいひ
県居大人（賀茂真渕）近
出づる事も侍りき。あがたゐのうしちか隣
転居　常久　交際
にうつろひたまひては、とはに行かひたまふ
歌会（宴）絶　年
まゝに、ことにこのうたげもたゆるとしなんあら
或　時　父（枝直）宣　汝
ざりける。あるときちゝ翁のたまへらく、「いまし、
歌　詠　忘　歌　トイフ
うたよむこと、なわすれそよ。うたてふものゝ
尊重　老　後
たふとむべき事はおいてのちおのづから
知
しらるゝことなれば、いまはいはず」とて、たゞ
愚　親　思
「おろかさのおやにゝよとはおもはねど
教　詠
をしへおかるゝ子の行へかな」とよみてたま

へりつる。もはやいそとせばかりのむかしに（五十年・昔）
なんなりぬ。かくてちゝ翁七十あまり（父・余）
二つのよはひにしてつかへをしぞきたまひ（年齢・宮仕・退）
ぬ。おのれかのをしへをまごゝろにまもる（己・彼父ノ教訓）
とはすれど、日にけにつかさにまうのぼりて、（異・勤務・参上）
ことゝあるときは、よるひるわがいへをすらかへり（事・夜昼・我家・顧）
見せざりしかば、おのづからおこたりぬる（歌ノ道ヲ）
ことも侍りき。さるを、父翁九十あまり
四とせといふよはひを在へたまひて、こと（年齢・生存）
さらになやめることもなくて八月のとをか（悩・十日）
の日なんみまかりたまひぬ。百とせに近き（逝去・年）
よはひをへたまへるものからあかぬ心に（年齢・経・モノノ）
まかせはてなんには猶あかず悲しくやは
あらぬ。おのれ、はた、この十とせさきに病に（己・以前）
よりてつかへをしぞきしよりほとけにむかひて（官・退職・仏・向）
のりのふみよまんよりは哥よみせんこそ（仏法・書（経典）・詠）
天がけるみたまもうべなひ給ふべけれと（枕詞・御魂）
おもふまゝに、たゞよみによみて月ごとの中ば（思・ヒタスラ・詠・毎・中旬）
にはひとゝ（人人）もとぶらひきまして、うたのつどひ（来・歌会・集）



なむしける。今年ことしちゝ翁のみまかりたまひて逝去
より十まり三とせになりて猶いわけなかりし十三回忌幼
をりの秋のなかばを、さへにおもひわすら中秋（八月十五日）思忘
えぬまゝに月のまへにむかしをしのぶと前昔
いふを題にてもろ〳〵の君たちの哥をも諸諸
乞孫詠
こひ、うからやからをむまごらまでもよみて
たむけまつれり。つら〳〵おもふに、かく人々の手向思
絶老後
たえせずとぶらひ給へるも「おいてのち歌
知
しらるゝことよ」とのたまへりしうたてふ
ものの光にこそあなれとやう〳〵おもひあ思
はせられて、いと〳〵かしこくぞおぼえ侍る。畏
これ、けふのつどひのうたの序といふにも今日集歌
あらず、たゞおもふこゝろのまに〳〵かき思心書
しるしてんとすれば、しかすがに記
なみだのみおちまゝりていとゞたど〳〵落涙
しくなむありつる。こは寛政九
年八月十三日のことなりつ。橘千蔭

右の本文の意味については、ここに解説するまでもないが、従来の文学史・近世歌学史・和歌史上に小さな援証となり、すこしは補えるところがあろう。

たとえば本文中の「月のまへに……たむけまつれり」のところは『うけらが花』巻六（校註国歌大系・第十六巻）に、

父君うせ給ひて十あまり三年に成りぬる八月の十三日人々をつどへて月の前に昔をしのぶといふ題にて歌よみて手向け奉るによめる

面影をあふぎてしのび古ごとをふしては思ふ袖の月かな

の箇所と関連があるようであり、「面影を」の歌の成立事情をものがたる一つの手がかりになるであろう。なお、末尾に寛政九年とあるから、千蔭六十四歳の作である。

千蔭の父枝直が有名な江戸南町奉行大岡越前守に仕えた与力であることはよく知られている。枝直の伝記などについては、関根正直氏の『からすかご』（昭和二年十月　六合館刊）にも詳説されているが、ここでは先掲の『和歌文学辞典』から引用させていただく。執筆者は神戸大学教授黒岩一郎氏である。

枝直（えなお）　元禄五1692―天明五1785・八・一〇。九四歳。本姓は橘。通姓は加藤。初名は為直、のち枝直。通称は又左衛門。南山・常世庵・芳宜園（はぎぞの）などと号した。〔閲歴〕伊勢の松坂に生れたが享保三江戸に下り、町奉行大岡越前守をたよってその配下の組与力となり、吟味役を勤めた。つづいて町奉行稲生下野守にも仕え、漸次重用されて宝暦九からは依田豊後守の命によって吟味方四人の外として、御吟味筋の重い役目を勤めている。彼は吏務のかたわら学問詠歌の事を好んで、賀茂真淵の江戸下降を迎えてはこれを師友として保護し、一時は己が管轄内の地に住わせたこともあった。〔業績〕彼の功績として特筆大書すべきは、謡曲の明和改訂がこの人の手によってなされていることである。けだし趣味豊かな文人であったのである。そして宝暦一三に七二歳で致仕したが、致仕の後はもっぱら好きな学問と詠歌のことにふけり、これについて学ぶ者も少なくなかったという。彼は生来義侠心に富み、真淵のことは言わずもがな、例の甘蔗先生で有名な青木昆陽を大岡越前守に推挙したのもこの人であった。子供の千蔭が歌人として大を成したのも、この父の感化によるもの多大であったことはいうまでもなかろう。家集には『あづま歌』六巻があり、歌論をうかがうべきものには「歌の姿古へ今を論ふ詞」「子に与ふる文」などがある。古今集の貴ぶべく新古今集の乱世の頽なる事を説き、今の世には治世の歌を起すべきことを説いたものであるが、後の「江戸派」の原流をなす思考と考える時、興味深いものである。

なお、「枝直君十三回忌追悼千蔭君文」の原文は縦三十三・五センチメートル、横八十九・五センチメートル、一行約十八字、五十一行に書かれたものであり、それを後人が軸にしたものである。字くばり、行数などは右の翻刻で知ることができるであろう。

おわりに、貴重な研究資料を見せていただきました上に御指導をたまわりました田中重太郎先生、参考資料をお貸しくださり、御教示にあずかりました柿谷雄三先生に心からお礼申しあげます。

（昭和四十七年十月二十五日受理）

（短大　助手補　国文学科）